

～銀座から140年～ 「ガス燈が照らした東京の街」展

会期：2014年 9月13日(土) ～ 12月23日(火・祝)

会場：＜GAS MUSEUM がす資料館＞ガス灯館2階「ギャラリー」

ごあいさつ

＜GAS MUSEUM がす資料館＞では、2014年 9月13日(土)～12月23日(火・祝)まで、「～銀座から140年～『ガス燈が照らした東京の街』展」をガス灯館2階「ギャラリー」にて開催致します。

1874年(明治7)12月18日に、芝金杉橋から京橋までの銀座通り沿いに85基のガス街灯が灯り、東京におけるガス事業が誕生しました。はじめ公営であった東京のガス事業は、後に初代の社長となる渋沢栄一の手腕により発展し、1885年(明治18)には民間会社となりました。

当初は裸火のあかりであったガス燈は、明治20年代に登場したカーボン電球のあかりと競争となりましたが、明治30年代にガスマントル燈が登場したことで優位に立ちます。全盛期の1917年(大正6)に、東京の街中では5,792基のガス街灯が灯り、夜の街を照らし出しました。

しかし大正はじめに電球の技術革新があり、昭和のはじめには東京の街中よりガス燈は姿を消してしまいました。

現在では、ガス燈は暖かみを感じさせるあかりとして、都内の京橋や銀座3丁目などに復刻されているほか、日本各地の街中で私たちの目を楽しませてくれています。

今回の展示では、東京のガス事業誕生時より事業の基礎を支えた東京のガス燈の姿を、写真や錦絵をはじめとしたさまざまな資料と共に展示紹介致します。

GAS MUSEUM がす資料館

■展示作品一覧

【展示解説】

学芸員 高橋 豊

東京にガス燈を灯す！

横浜に日本で始めてガス事業を興した、実業家の高島嘉右衛門(たかしま かえもん)とお雇い外国人アンリ・プレグランは、工場建設部材買い付けに渡欧した際に、当時の東京府知事である壬生基修(みづもと おさ)の依頼により、東京でのガス事業設立のための機材も購入してきました。

東京にガス燈が灯る三年前(1871年)の出来事です。資金は江戸町会所(後に東京会議所)の七分積金(江戸町民の共同備蓄制度)より支出しましたが、事業の主体が東京府か江戸町会所かが曖昧であったため、届いた資材は深川の倉庫にしまわれたままになりました。

その後東京会議所では、プレグランを雇い入れてガス燈建設の計画実行にあたらせました。ガス製造工場を芝浜崎町(現：東京ガス(株)本社所在地)に建設し、プレグラン自ら実測して銀座通り沿いにガス街灯が建設され、1874年(明治7)12月18日に京橋まで85基のガス街灯が点灯しました。

- 1) アンリ・プレグラン 肖像
- 2) 高島嘉右衛門 肖像
- 3) 渋沢栄一 肖像
- 4) 東京瓦斯燈市街埋簡図絵

アンリ・プレグラン 1874年(明治7)



この図面は東京の街中にガス街灯を敷設するため、アンリ・プレグラン自身が作図したガス埋設管図です。図面右下には直筆のサインも記されています。図面下のガス工場が置かれた芝浜崎町の地から、ガス管は新橋、銀座レンガ街そして日本橋の先で分岐し、一方は両国橋方面へ、もう一方は万世橋まで伸びています。

当初は京橋までの85基のガス街灯が点灯し、その間隔は、金杉橋から新橋までは約45mごとに、新橋からは約27mごとに建てられました。

ガス街灯一ヶ月あたりの料金は3円55銭5厘でしたが、前年に発売された郵便ハガキ一枚が全国1銭という金額と比べると、高価に感じられる価格でした。

ガス会社誕生

東京のガス事業の運営は、当初は東京会議所が行い、おもな収入源はガス街灯の使用料でした。

設置されたガス街灯の費用は、自身の建物前に設置されて、恩恵を受ける人へ請求されましたが、自ら希望

して設置を願い出た訳ではないこともあり、支払が滞り運営に支障をきたしました。

この様な状況で、ガス事業の運営を立て直すため請われたのが渋沢栄一でした。

1876年(明治9)5月に東京のガス事業が東京府の経営となると、翌年の3月からは府税によって街灯の費用を肩代わりして、事業の安定を図るよう尽力しました。

利用者の増加を図るため、設備を増築してガス供給量を増やすとともに、料金の値下げや設置費用の月賦支払いなどを導入し、ガス街灯布設沿線の人々に屋内でのガス燈利用を勧誘しました。

その結果屋内灯の収入は、1877年(明治10)の年間収入に対し1879年(明治12)の半年だけで1.3倍の収入増となり、後に渋沢栄一は『屋内引用運動をもっと早くからやるべきであった』と反省するほどでした。

運営に道筋の見える東京のガス事業は、1885年(明治18)に民間に払い下げられ、その費用で創設以来の借金を返済し、東京瓦斯會社(現:東京ガス(株))として生まれ変わりました。

その運営は引き続き渋沢栄一が担うことになり、130年あまり続く民間会社としての礎を築くことになりました。

5) 東京名勝図会 金杉橋より芝浦の鉄道

歌川広重 (三代) 年代不詳



6) 写真 東京府瓦斯局全景

1878年(明治11)頃



7) 東京名所図会 銀座通り煉瓦造

歌川広重 (三代) 1879年(明治12)

点消方 (てんしょうかた) 自動点火装置やタイマーなどがない当時のガス街灯には、決められた時間に点消作業をおこなう人物がいました。

一般的には「点灯夫(てんとうふ)」と言われ、東京ガスでは「点消方(てんしょうかた)」と呼ばれました。彼らは「点消方」と分かる半纏(はんてん)を羽織り、火種のついた棒(当初は2本、後に1本)を持ち、50本から多い人は100本近くのガス街灯を受け持って

ガス街灯がある限り必要な仕事で、東京では昭和初期まで点消方は活躍していました。

8) 立斎漫画

歌川広重 (三代) 1879年(明治12)

写真と錦絵から見る東京のガス燈たち



9) 東京名所 京橋銀座通り煉化石瓦斯燈景ノ図

歌川広重 (三代) 1880年(明治13)

10) 写真 銀座街「明治大正建築写真聚覧」より

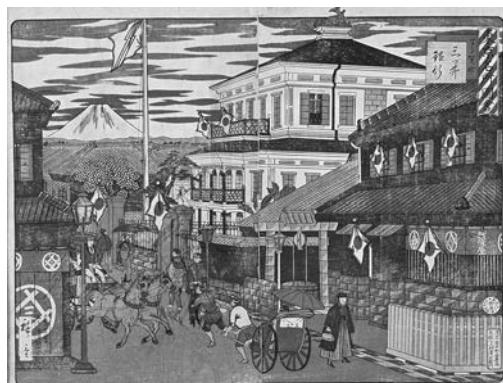
1936年(昭和11)

11) 東京名所図会 尾張町日々新聞日報社

歌川広重 (三代) 1880年(明治13)

12) 写真 日報社「明治大正建築写真聚覧」より

1936年(昭和11)



13) 東京名所図会 する賀町三ッ井銀行

歌川広重 (三代) 1878年(明治11)



14) 写真 駿河町三井組

「明治大正建築写真聚覧」より

1936年(昭和11)

15) 東京真画名所図解 鹿鳴館

井上安治 1884-1889年(明治17-22)

16) 写真 鹿鳴館「明治大正建築写真聚覧」より

1936年(昭和11)

17) 東京名所図絵 新富座開業式花瓦斯燈

歌川広重 (三代) 1878年(明治11)

- 18) 写真 新富座 「明治大正建築写真聚覧」より
1936 年 (昭和 11)
- 19) 東京三絶景 上野山内之雪
矢島徳三郎 1890 年 (明治 23)
- 20) 写真 上野公園
年代不詳
- 21) 東京府下名所尽 四日市駅通寮
歌川広重 (三代) 1874 年 (明治 7)
- 22) 写真 駅通寮 「明治大正建築写真聚覧」より
1936 年 (昭和 11)
- 23) 東京名所 常磐橋内紙幣寮新建之図
歌川広重 (三代) 1877 年 (明治 10)
- 24) 写真 印刷局 「明治大正建築写真聚覧」より
1936 年 (昭和 11)
- 25) 古今東京名所 外桜田陸軍参謀本部
歌川広重 (三代) 1883 年 (明治 16)
- 26) 写真 参謀本部 (舊)
「明治大正建築写真聚覧」より
1936 年 (昭和 11)
- 27) 筋違万代橋租税寮之図
歌川広重 (三代) 1875 年 (明治 8)
- 28) 写真 万世橋租税寮
「明治大正建築写真聚覧」より
1936 年 (昭和 11)

写真と錦絵から見る東京のガス燈たち

- 29) 写真 ガス燈設置風景
2008 年 (平成 20)
- 30) 二つ折腕ガスランプ



1927年(昭和2)に建てられた、文京区の個人宅に設置されていた室内灯です。1912年(明治45)の東京ガス手彩器具カタログに掲載されており、1925年(大正14)から1927年(昭和2)のカタログでの紹介では、5円50銭で販売されていました。

- 31) 写真 東京ガス手彩器具カタログ
1912 年 (明治 45)
- 32) 亥 30 號一出腕ランプ
1927 年 (昭和 2)
- 33) カタログ写真 卓上スタンドランプ
1935 年 (昭和 10)
- 34) 卓上スタンドランプ
- 35) カタログ写真 藤原式一出腕ランプ
1929 年 (昭和 4)

36) 藤原式一出腕ランプ

- 37) 写真 実用新案 下向瓦斯火口
1910 年 (明治 43)
- 38) 壁掛式下向ガス燈

電燈との競争とマンツルの発明

1887年(明治20)に東京で電気事業が始まると、共に赤い光を放つカーボン電球と裸火のガス燈は照明の分野で競争を始めました。ガス会社では電燈を意識した広告を作成するなどして、ガス燈のPRに努めました。この競争において一歩先んじたのはガス燈でした。「マンツル」という発光体をガスの炎で熱することで、黄色みがかかった白いあかりが利用でき、当時の人の目には裸火のガス燈と比べ、「5倍あかるい」と映りました。1886年(明治19)にオーストリアで発明されて、1896年(明治29)には日本に輸入、1901年(明治34)には国産化もされました。その後、大正のはじめにかけて全国各地にガス会社が誕生し、マンツルを利用するガス燈が広く使われるようになりました。

比較	力	光	發
瓦斯燈	100	100	100
電燈	100	100	100
カーボン電球	100	100	100
マンツル	100	100	100
...	...	...	...

- 39) ガスランプ引札
1889 年 (明治 22)
- 40) 写真 銀星ガスマンツル 登録証書
1909 年 (明治 42)
- 41) 銀星マンツル

東京勸業博覧会 瓦斯館

1907年(明治40)に上野で開催された東京勸業博覧会は、公園が第1会場、不忍池周辺が第2会場となりました。特に第2会場では外国館や企業出展の建物が多く並びましたが、そのうちの一つが「瓦斯館」と呼ばれた、東京ガスによる展示館でした。館内では各国のガス器具を展示するほか、風月堂によるガスを利用した焼菓子の提供を行っていました。そして目玉は、夜、建物外観に張り巡らしたガス管に2,400燈の炎を灯し、会場の夜間の光景を彩りました。博覧会終了後に建物は、深川図書館へ生まれ変わりました。

- 42) 絵はがき 東京勸業博覧会 瓦斯館
1907 年 (明治 40)

43) 絵はがき 東京勸業博覧会 瓦斯館 夜景
1907 年 (明治 40)



44) 写真 東京勸業博覧会 瓦斯館 夜景
1907 年 (明治 40)

45) 写真 東京勸業博覧会 瓦斯館 館内風景
1907 年 (明治 40)

46) 写真 浅草寺観音本堂
年代不詳

47) 浅草寺境内埋設管図
1908 年 (明治 41)

明治の終わりとガスの篝火 (かがりび)

1912 年 (明治 45) 7 月 30 日に明治天皇が崩御されると、新しい時代を迎えるのと合わせ、同年 9 月 13 日から 15 日にかけて大葬のさまざまな儀式が行われました。

この 3 日間、二重橋から馬場先門までの道筋両側と青山の葬場には、ガスの篝火が掲げられ、また街中のガスの献灯数は 216 基を数えました。

写真や錦絵に見えるガスの篝火の姿は、現在から振り返ると、ガス灯時代の終わりを告げる輝きでもありました。

48) 写真 ガスの篝火
1912 年 (大正元)

49) 二重橋外御大葬之図
半晡 1912 年 (大正元)

震災復興と明かりとしてのガス灯

大正のはじめに電球も技術革新があり、「タングステン電球」が量産されるようになると、電灯の方が完全に優位に立ちました。

しかし東京の街中では、先にガス灯が広く普及していたこともあり、すぐには大きく切り替わることはありませんでした。けれども、1923 年 (大正 12) 9 月 1 日

に起きた関東大震災により、被害を受けた街や建物が復興していく中、あかりとしては電灯が選ばれ、ガスの炎はあかりから、調理や温水、暖房などの熱源用途へ利用方法が変わってゆきました。

50) 最新東京名所写真帖 愛宕山
年代不詳

51) 絵はがき 東京芝愛宕山表坂
1936 年 (昭和 11) 頃

街中にわずかに残るガス街灯

関東大震災の被害をあまり受けなかった地域では、その後も室内灯や屋外灯としてガス灯は利用されました。中でも上野公園内には、1934 年 (昭和 9) の時点で 33 基のガス街灯が点灯しており、1937 年 (昭和 12) のガス会社の社内報で、「上野に残る最後のガス灯の姿」が紹介記事と共に写真に残されています。以後、戦時体制に進む中で、ガスの最初の利用方法であったガス街灯は、東京の街中より姿を消してしまいました。

52) 上野公園内ガス灯配置図
1934 年 (昭和 9)

53) 写真 上野公園に残るガス灯
1937 年 (昭和 12)

東京の街中に灯る、現在のガス灯たち

一度は東京の街中から姿を消したガス街灯ですが、昭和 40 年代に入るとガス灯を新たに復刻する動きが起き始めました。

ガス灯の放つ柔らかい光やクラシカルなデザインは、建物や地域のモニュメントとして利用され、現在は東京ガスの供給地域で約 430 灯、全国では約 3,000 灯のガス灯が、私たちの周りで輝いています。

おもな参考文献

東京府統計書 (明治 10 ~ 昭和 13)
双子のガス会社 中根君郎 1985 年
東京ガス 50 年・70 年・90 年・100 年史
東京ガス (株) 1935 年・1955 年・1975 年・1985 年
東京瓦斯株式会社沿革及事業成績
東京ガス (株) 1907 年
深川図書館解体記録調査報告書
江東区教育委員会 1997 年
明治工業史 土木編 (社) 日本工学会 1931 年
朝野新聞の研究 鶴飼新一 (株) みすず書房 1985 年

GAS MUSEUM がす資料館 企画展ご案内郵送申込について

ご来館ありがとうございます。これから 3 ヶ月ごとに開催されます、「GAS MUSEUM がす資料館 企画展」のご案内はがきの郵送をご希望の方は、官製ハガキに ①氏名 ②連絡先住所 ③年齢 ④電話番号 ⑤感想・意見 ⑥今後希望する企画展、をご記入の上、下記の住所までお申し込みください。

次回より約 1 年間、毎企画展ごとにご案内ハガキを無料で郵送します。

(ハガキ持参で来館された方は、そのまま継続して登録されます)

〒187-0001 東京都小平市大沼町 4-31-25 GAS MUSEUM がす資料館「ご案内ハガキ」係

TEL(042)342-1715 FAX(042)342-8057

《当館のお客様情報(個人情報)は、当館イベント運営に必要な業務を含め、当館に関連する企画、及びサービスのご案内のために使用いたします。》